

古典教育における「文化力」育成の意義

—古典教育はどこに向かうべきなのか—

筑波大学 大学院 人文社会科学研究所 文芸・言語専攻 石塚 修

キーワード：古典教育 文化資本 伝統 継承

1. はじめに

古典教育の主眼が「言語の教育」におかれていることは言うまでもない。だが、それを通じて学習者にもたらされる成果を考えると、それは国民としての文化伝統の継承の基礎づくりとなる「文化の教育」への階梯となっている部分も大きいといえる。この点は、現行『学習指導要領』の「改善の基本方針」に

(ウ) 古典に関する指導については、我が国の文化と伝統を尊重し、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成を重視する¹⁾

とあることから窺えよう。

では、その「我が国の文化と伝統」とはどのような存在であり、それを「尊重」する態度とはいかに「育成」されるべきなのであろうか。この点について、国語教育の分野で具体的に言及している論考はどれほど存在するだろうか。もちろん、個々の古典作品を取りあげて、その古典教育における意義を検証している論は散見できるけれども、学習者に「我が国の文化と伝統」として最低限身につけさせるべき「ことがら」を体系的に学習活動として計画し、それを基盤として「我が国の文化と伝統」を継承する次世代の国民としての成長を期待するような視座が、従来の古典教育論にはほとんど見られなかったのではなかろうか。

本発表では、「文化の教育」のための基盤づくりとなるための古典教育の模索について考察を進めていく。

2. 「文化」について

そもそも「文化」とは何かという厳密な定義をしないままに、この考察を進めることには問題がある。だが、それは容易に確定できるものではない。そこで、築島謙三『文化心理学基礎論』における「文化」論の整理を糸口として、「文化」の概念について考えることとする。

人類学ではE・B・タイラーによる文化についての古典的定義以来夥しい数の文化の概念づけが試みられたが、それらの多くを集め註釈を加えた大冊がクローバーとクラックホーンの共著として刊行された。定義内容の性格にしたがい記述的、歴史的、

規範的、心理学的、構成的、発生的の六つに分類している。次に各分類の中から一例ずつ示そう。

第一類 文化とは知識、信仰、芸術、道徳、法律、風習および社会のメンバーとして人が獲得した能力、習慣のすべてを含んだ複合体である(Tylor,E.B.,1871)

第二類 文化はわれわれの生活構造を決定する社会的に伝達された風習、信仰の集合である(Sapir,E.,1921)。

第三類 地域共同体あるいは部族の生活様式が文化であるが、……文化はすべての標準的な社会行動を含む。……部族文化というのは、その部族がしたがう標準的信仰と行動の集合である。(Wissler,C.,1929)

第四類 人間は適応のために努力することを学ぶが、その努力が作りだした結果ないし産物が文化である。

(Blumenthal,A.,1941)

第五類 一つの文化というのは、相互関連し相互依存する習慣的反応の諸類型からなる一体系である(Willey,M.,1929)。

第六類 文化は人間の集団が作りだした産物である。

(Croves,E.R.,1928)。

これらの定義はそれぞれちがった観点にたってなされたものである。のべていることはみな正しく、相互対立する点は見られない。第一類は大體文化内容を項的に列挙したものであり、第二類は伝達されるという点をあげているので歴史的とし、第三類は人々の行動の規準を示しているもの、第四類は人間的適応の概念があらわれており、第五類はむしろ文化の性質をのべており、第六類は発生的観点にたっている。²⁾

以上から、文化とは、基本的に「社会・集団生活」・「共通・相互理解」・「伝達」の要素が含まれる存在であることが定義できよう。

3. 第二次大戦後の我が国の文化戦略

我が国の文化・伝統が、欧州で19世紀後半に「ジャポニスム」として開花したことは周知のことである。しかしながら、当時の我が国は脱亜入欧による富国強兵を目指して、積極的に文化を国際的外交の武器にしようとはしな

*1 文部省『学習指導要領解説国語編』東洋館出版 1999 p.4

*2 築島謙三『文化心理学基礎論』頸草書房 1662 pp.97-98

った。そのため軍事国家として破綻した第二次大戦後には、ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』に、

敗戦からまもない時期、もっとも流行したスローガンのひとつに、日本は「文化国家」をめざすべし、というのがあった。³とあるように、「文化」を国家経営のための基盤としていくとする機運が高まった。しかしながら、その考えも高度経済成長と共に生産性を高める経済優先の国家経営になり希薄となり、政界・経済界も含めて国家全体として我が国の「文化」をどう扱うかという共通理解が形成されないまま、現在を迎えているといってもよいだろう。しかし、一部の経済人には、次世代の国家戦略として積極的に「文化」を「経済」と結びつけるべきだとの意見も出されてきた。日下公人は『新・文化産業論』の中で、

社会が存続していくためには、第一に物の再生産が必要である。日々消費される物財の補給である。つづいて第二は人の再生産である人は死に、人は生まれてくる。子供を生んで育てなくては社会は消滅する。第三は価値観の継承が必要である。生まれしてきた子供を教育して同じ価値観を与えなくては社会は別のものになってしまう。……第四に加えるとすれば、それは“文化開発”と呼ぶにふさわしいだろう。社会の多くの人が自己実現(=幸福)の喜びを求め、そのために所得と時間と能力を多く注ぐような時代—したがって産業活動もそれに関するものが大きく成長する時代—それを私は文化開発の時代と呼んでみたい。⁴

と述べている。このように日下氏は「文化開発」を、我が国の国家的産業として注目していくべきだと提言した。

経済成長の順調な中では、なかなかこうした文化の価値そのものを重視した産業には注目が集まらなかったが、バブル経済の崩壊後の我が国の産業界の低迷による閉塞感の中、その打開策として「文化」にたいして、経済界が注目し始めている。そのことは1997・8年に文化庁から出された「文化振興マスタープラン」による「文化立国の創造」の提言に窺える。

文化は、人として生きるあかしであり、創造的な営みの中で自己の可能性追求する人間の根源的な欲求であり、生きがいである。また、文化は人々の心のつながりや相互に理解し尊重しあう土壌を提供するものであり、心豊かなコミュニティを形成

し、社会全体のよりどころとなるものである。さらに、文化は、それ自体が固有の意義を有するとともに、同国民性を特色づけ、国民共通のよりどころとなるものである。…また一方、我が国が今後とも活力ある社会を維持し世界に積極的に貢献していくためには、先導性や独創性を一層発揮する方向へ転換を図ることが求められており、単なる量的な拡大を中心とする経済成長から、経済の質を高めていく方向への転換が必要となっている。これらの状況下で、とりわけ、創造力が求められる科学技術と文化は、国民生活や社会を支えるものとして、その重要性は急速に高まっている。心豊かな活力ある社会を形成していくためには、科学技術と文化はいずれも振興する必要があり、科学技術創造立国の実現とともに、文化立国の実現が不可欠である。⁵

さらに近年では、こうした論調が相次ぎ、杉浦勉の……こうした「文化力」にかかわる分野の産業は日本経済の死活を握る可能性がある。というのは、中国などの台頭で、従来の価格競争では日本企業が太刀打ちできなくなりつつあるからだ。今後の活路としては、品質のさらなる向上と、特許や著作権など、付加価値の高い「文化力」を製品に加味して勝負していくしかない。その意味で「知的戦略」が国家的に重要であることは間違いない⁶

という見解や、浜野保樹の、

われわれは小さな頃から繰り返し繰り返し、日本は資源のない小さな島国だと教わってきた。それが資源とは物的資源のことだという、偏った観念を植え付け、洗脳してしまった。しかし日本は文化資源の豊かな国であった。文化を作り出す気風は長く維持される。……

文化はその文化圏に属する者みんなが持っていて、誰も占有できず、誰も奪うことができない。それこそわれわれの最大の資源なのだ。⁷

といった見解にもつながっており、ともに我が国の低迷した経済状況を打開するために、我が国の伝統を受け継いだ「文化」の発信を武器としていく必要性を説いている。

さらに外国人の側からも、ダグラス・マッグレイの「世界を闊歩する日本のカッコよさ」という論文に見られるように、

もし日本が自国の経済的混乱や軍備に対する不安を解決し、若い世代が独自の価値観や伝統をしっかりと主張するようにな

*3 ジョン・ダワー 三浦洋一ほか訳『増補版 敗北を抱きしめて』(上) 岩波書店 2004 p.7

*4 日下公人『新・文化産業論』東洋経済新報社 1978 pp.8-9

*5 文化庁監修『新しい文化立国の創造をめざして』I-2「今なぜ文化立国か」1999 p.11

*6 杉浦勉「日はまた昇る—ポケモン興国論」『文藝春秋』2003.10 p.190

*7 浜野保樹『模倣される日本—映画、アニメから料理、ファッションまで—』祥伝社 2005 pp.240-241

れば、日本政府も十九世紀の変わり目に一時的に担った役割を取り戻すことができるのではないだろうか^{*8}という意見が述べられ、ますます「文化」の重要性が強調されてきている。

4. 文化資本について

「文化」を数値化可能な「資本」として見なすことは、ピエール・ブルデューにその発想がある。ブルデューの「文化資本」の定義とは、

文化資本 *capital culturel* 広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境・学校教育を通して各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・技能・趣味・感性など(身体化された文化資本)、書物・絵画・道具・機械のように、物資として所有可能な文化財物(客体化された文化資本)学校制度やさまざまな試験によつて賦与された学歴・資格など(制度化された文化資本)以上の三種類に分けられる。

学歴資本 *capitai sociale* 学校制度によって与えられたいわゆる学歴・およびそれに付随するさまざまな個人的能力や社会的価値の総体。したがって前項「文化資本」の第三の形態にほぼ重なるが、第一の形態にも関わるものであり、いわば「学校」という場で獲得された文化資本の一特殊形式であると言える。

社会関係資本 *capitai social* さまざまな集団に属することによって得られる人間関係の総体。家族・友人・上司、同僚、先輩、同窓生、仕事上の知人などいろいろあるが、そのつながりによって何らかの利益が得られる場合に用いられる概念で、いわゆる「人脈」に近い。(なお社会資本という訳語は別の意味で日本語として定着しているため採らなかった。)*9

ブルデューの「文化資本」の概念規定を古典教育へ展開していくことで、「教養主義」が没落した^{*10} 我が国の現代社会において、古典教育が今後どのような役割を果たせるのかという示唆がもたらされよう。

5. 古典教育と文化継承の問題

我が国の古典教育を通して「文化資本」は蓄積していけるのか、その点を考えるには次の二人の古典教育観が重要になろう。

*時枝誠記「古典教育の意義」

私は、古典といふものは、現代人が認めると否とに関せず、また、現代生活に役立つものがあると否とに拘はらず、古典は古典として存在すべきものと思ふ。……

古典教育の意義は、むしろ、現代に無いものを求めるところにあるといふべきである。現代と相通するもの、現代的感覚に寄与するものを古典に求めるといふことは、古典に対する正しい態度とはいへないのではなからうか。古典に現代的意義を求める態度は、現代に対する過信から出てゐるのだと思ふ。現代人は、尚古思想に対する反動として、現代的なものを、過去一切のものが克服された頂点であると考へてゐる。従つて、過去のものに対しても、現代に通ずるものにしか価値を置かうとしない。…

古典教育に対しては、従来、屢々感化主義がとられて来た。古典の持つ思想的感情に触れさせて、そこから、人間形成に資するものを汲みとらせることを、主として考へた。私は、それを、「惚れさせる教育」と呼んだのである。古典教育は、そのような惚れさせる教育であつてはならないので、むしろ、民族の偽らぬ姿に触れさせることに目標がなければならぬと考へてゐる。……古典教育とは、己の美に惚れさせることでもなく、醜を覆ひかくすことでもなく、己のありのままの姿に直面させることを教へるところのものである。^{*11}

*西尾実「古典教材論」

古典は、その成立に於いて「古」であり、その意義に於いて「典」である。即ち、過去のある段階に於ける完成的作品であつて、後代の文化の源泉となり、範型になるものに外ならない。……我が国の歴史の上に於いて、文化の革新はもとより、政治的革新さえ、その過程に於いて、何等かの形で古典にその出発点を求めなかつた例はない。^{*12}

国語教育界を代表する二人のこれらの見解を改めて「文化資本」と結びつけて考えたとき、今後の古典教育の方向性が見えてくる。我が国の持つ文化の特性を、けつして「かっこよさ」にのみとられることなく、他の異文化と照らし合わせて冷静に見つめる能力を古典を学習材として、学習者に身につけさせること。そして、それらを基盤にして

*8 ダグラス・マッグレイ／ 神山京子訳「世界を闊歩する日本のカッコよさ」『中央公論』2003.5 p.135 (2002 FORINE POLICY 130)

*9 ピエール・ブルデュー 『ディスタンクシオン [社会的判断力批判] I』石井洋二郎訳 藤原書店 1990 訳者まえがき

*10 竹内洋『教養主義の没落』中公新書 1704 2003

*11 時枝誠記「国語教育の方法」『時枝誠記国語教育論集 I』明治図書 1984 pp.92-94 (初出「国語教育に於ける古典教材の意義について」『国語と国文学』昭和 23・4) *時枝誠記の古典教育観については、近年、渡辺春美『戦後古典教育論の研究』(2004 溪水社)に詳細な検討がある

*12 西尾実「古典教材論」『西尾実国語教育全集』第9巻 教育出版 1954 pp.435-439

国際社会において我が国の文化と伝統をまえて自己を的確に表現していくことができる資質を学習者に涵養すること。これらが、これからの古典教育に求められる大切な役割といえるのではなからうか。

6. 古典教育で継承されるべき「ことがら」は何か

古典教育を通して継承され、社会に蓄積されていくべき要素には具体的にどのようなものがあるのか。海外向けの日本文化紹介のように「能」「歌舞伎」「茶の湯」「華道」といった「ことがら」への理解を深めることに終始したのでは、たんなる「海外向け日本文化案内」に終わってしまう。日本人の日本文化の理解とはどのようなものであるべきか。本田和子は次の指摘に注目したい。

とすれば、衰退しつつあるのは一体何なのだろうか。民俗の行事は、「祭り」に代表されるように共同体アイデンティティ確立の機会であり、また、伝承の遊びも、身体を介して共有される仲間意識の発達を助けた。子どもたちは「ともに走り、ともに手足を動かす」この機会を通じて、それぞれ、仲間の中の自分の居場所を確認していったのである。……

民族伝統の衰退と消滅が案じられているが、その中で、復活と活性化が図られねばならないのは何であり、それはどのような根拠に基づくのだろうか。とりわけ「子どもにとっての民俗の再生」とは何か。肝要なのは「行事」「習俗」のさながらの維持・保存や、「食事」「玩具」などのそのものの継承ではない。それにもまして、そのことにかつて付託されていた意味と、それがかつて子どもたちの間で発現されていた機能をとらえ直すことではないか、そして、仮に、それら意味と機能の欠如が、子どもらの生育にとって致命的な欠陥と見なしうならば、そのことの現代的補完こそが図られるべきであろう。¹³

この見解は、古典教育でなされるべき具体的教育内容への指針を与えてくれる。「ことがら」そのものの教育だけではなく、そこに付託されている文化伝統の意味にこそ目を向けさせる教育に向かうべきだと主張しているからである。有名古典作品の一部をただひたすら暗記させることに終始したり、原文解釈能力を古典文法一辺倒の教育で一律に身につけさせたりするのではなく、そのような古典が日本文化の中でなぜ発生し、世界的にはどのような特性を持つものなのか、そこに気づかせる学習づくりを目指すべきであろう。

そしてそうした学習を通して、学習者が縦軸には「伝統」の中での自己を、横軸には「社会」における自己の位置づ

けを行えるようにし向けていくことも重要であろう。

このことは、本田由紀が『対人能力格差』がニートを生む』で指摘しているように、

より重要なのは「学力」だけではなく「対人能力」というもうひとつの側面に対しても社会全体の関心と注目が高まり、子どもや若者にそれを形成していくうえでの大人の責任が広く自覚されるべきだということである。そのためには大人自身の「対人能力」への反省が必要だろう。私たち大人は、家族や親しい人と、あるいは仕事上の仲間と、さらにはたまたま出会った見知らぬ人と、対話によってきちんと関係を結べてきたといえるか。この社会には、「対人能力」の軽視に由来するような凝りが沈殿していないか。子どもや若者のあり方は、私たち自身のあり方への鋭い問いをつきつけている。¹⁴

といった現代の教育が抱える問題にも通じていく。国語教育のみならず、社会・学校教育全体からも、古典教育は再度見直される時期に来ている。

7. おわりに

本発表は、発表者が近年行ってきた以下の古典教育への提言による部分が多い。

* 「開かれた古典教育を目指して」

『月刊国語教育』東京法令 2001.9pp.16-19

* 「文化力を育てるための『古典教育』」

『月刊国語教育研究』日本国語教育学会 2004.3 pp.50-55

* 「解釈力から文化力を目指す古典教育を」

『月刊国語教育』東京法令 2005.1 pp.36-39

学力観の多様化と少子化による大学入試の変化によって、従来、「大学受験」を錦旗として行われてきた古典教育のあり方は変革を求められている。しかし、教育現場ではなかなかその改革への機運が生まれていない。学習者の「古典離れ」を嘆くのみで、教師たちが自らの教育内容や方法の再検討を先送りしていたならば、変革どころか古典教育そのものが我が国の社会全体から不要とされてしまいかねない。しかしそうなったときには、「文化」によって生きていかななくてはならない次世代の国民はどうなるのだろうか。そのことを国語教育界のみならず、日本語・日本文学の古典分野に関わる研究者全体が深く認識して、古典教育によって、我が国の文化伝統が「文化資本」としてどれほど蓄積され、それが次世代に継承されていくとどれだけ有為な資源となり得るかを考え、計画的で戦略的な古典教育の体系づくりに、今こそ取り組むべきであろう。

*13 本田和子「子どもの世界」新谷尚紀ほか編『暮らしの中の民俗学』吉川弘文館 2003 pp.35-60

*14 本田由紀『対人能力格差』がニートを生む』『中央公論』2005.4 pp.82-91